

幼児教育の文化性

— 講習筆記 —

倉橋惣三

目次

- 第一 序論
- 第二 道徳教育
- 第三 宗教教育
- 第四 藝術教育

お暑いところ、お互様に御苦勞で御座います。私は本年は色々の都合で、相當澤山な時間お話をする事になりました。私も相當こたえると思ひますが、皆様の方も一層御迷惑であらうと思ふのであります。

そこで、斯う云ふ様に時間の多い時に、何う云ふお話を申上げるのがいゝか考へたのであります。先づ大體に於き

まして、本年は、幼児教育の文化性でも申しませうか……其方に屬する問題を考へて見度いと思ふのであります。

幼稚園の問題を考へるに就きまして、勿論目的の方法が離れたものではありませぬ。目的が即ち方法を生み、方法が即ち目的の中に持つて居るものであります。然し取扱ひ方としては、主として目的方面の著眼で行きます行き方、方法方面の著眼で行きますの二つに分ち得ると思ふのであります。

そこで、多く幼稚園の保育法研究として取扱はれますものは、大體は方法的方面が主になつて居りまして、これが誠に限りなく難しいものであります。ここ迄行つても、これでもういゝ云ふところに行き難い様な厄介な面倒な、骨の折れる、皆様の御苦勞な方面であります。ところが、更に、それに對しまして、目的方面云ふのもあるのであります。さう云ふ方面を、今回は大體に於て狙つて行かうと思ひますが。そこで今朝は、その全體のお話の序論と言ひますが……本論に入りませぬお話を申上げようと思ひます。

第一 序論

一體教育云ふものは、その教育でありまして、その教育が狙つて居ります、又遠く根ざして居ります眞の目的、今相手にして居りますところの對象との距離が、教育をして必要ならしむると共に、困難ならしむるものである云ふ事は申せると思ふのであります。まあ斯う云ふ態度で、何でもない事を態に難しく言つた様な事ではありますが、詰り子供を立派な者にしよう云ふので骨が折れる、云ふ事でありまして、小學校の教育でも中等學校の教育でも、又對象それ自身が相當高い所に進んで居ります大學の教育にしましても、それを、より高い所に持つて行かうとする、詰りその距離の差

までも申しませうか、それが教育を難しくさせるのであります。若しもその目的が、すうつゝ低い處に手近に下りまして、對象がすつゝ或處迄競り上つて來る程用意されて居りますならば、これはもう、斯うしよう云ふ事、斯うである云ふ現象が近付いてゐるのでありますから、こゝに別に教育の問題は必要もない譯であります。

そこで、斯う云ふ風に總ての教育云ふものを眺めた時に、幼稚園の教育はさう云ふものであらうか。幼稚園の教育は、その對象即ち幼児が、世にも程度の低い者であります。實に程度の低い者であります。そこから教育が先づ始めて始まる云つた様な初歩のものである。教育の目的云ふものが何所にありませうとも、その相手の幼児の程度の低さに對しまして、こゝの距離云ふものは相當遠いのであります。この意味で、幼児教育云ふものは實に難しい骨の折れるものだと考へられると思ひます。

そこで、さう考へて、そこから問題が色々分れて參りますが、教育者云ふものが、相手に向つて、教育者として自分が持つて居ります目的は、相手の如何に拘らず同一である言はなければならぬと思ふのであります。中等學校の教育者は、より高き目的を持ち、小學校教育者はそれより低き目的を持ち、——この論法で、幼稚園教育者はすつゝ低い教育目的を持つ、と言ふ事は決して出來ないのであります。教育者は、相手の如何に拘らず、自分が持つて居ります人生究極のこころを遙かなる根ざしとして居るのでありますから、そこは矢張りされも同じ高さにある。その同じ高さにあるものを、相手に持つて來ますその距離は、幼稚園に於て一番遠い譯でありまして、幼稚園教育は實に難しい云ふのが、そこだと思ひます。私は、幼稚園の先生は斯う云ふものだき定義が出來るかと思ふ。自ら持つて居る教育目的は、世にも最高なるものを持つて居る。それは、幼児教育者である前に教育者である。ですから、人間教育者云ふ意味に於ては實に高いものを幼児教育者も持つて居るのであります。さう云ふ非常に高い高い、實に高い人生目的を持つて居り乍ら、今取

扱つて居るものは、世にも程度の低いものである。一面には、非常に高いものを持つて居り、低いものを相手にして居る。その遠い距離の間に往來して居る言ひますかその間に丁度適當なる處置をこつて居る、言ふか、これ容易ならざる問題であります。幼児教育者は、目的の高さに於ては他を變らない。即ち教育者である言ふ意味に於て、決して低い教育をして居るのではありません。けれども、相手言ふものは、世にも低いものである。ですから幼児教育者は、他の教育者よりもそこで自分の持つて居る目的を、今與へようとして居る對象の距り言ふもの言ふ一種特有の位置に置かれて居る言へるのであります。斯う申します言、皆様の頭の中に浮びますのは、幼児教育の目的はそんなに高くない筈だ言ふお説が出るかも知れませぬ。殊にお前等も常に言つて居るではないか、幼児教育は幼児に即して行く可きものであつて、そんなに高い目的で幼児を引張つて行かうとするのは無理な目的である。幼児教育の本質は基本教育であり、隨つて目的も基本教育的目的であつて、そんなに高い目的でやつて居るのぢやない。それが殊に幼稚園令第一條に現れて、實に何言ひますか——お手輕言ひますか、手近言ひますか、お手柔か言ひますが、さう言ふ目的に書き現されて居るぢやないか。幼児を捉へて聖人君子をなし、幼児を捉へて完全なる人間をなし、幼児を捉へて悟りを開かしめる言ふ事は、幼稚園令第一條に書いてない。幼児を捉へて、僅かに、心身を健全に發達せしめ、善良なる性情を涵養する言ふ、麓一合目の様な事を目當にして居るのぢやないか。さつきからの話では、大層偉い目的を持ち、それが低い幼児との間に距りを感じしめる言ふ話だが、幼児教育の目的は幼稚園令が示して居る如く、そんなに高いものぢやない——斯う言はれるかも知れません。これは一應誠にその通りでありまして、幼児を幼児として何所へ連れて行かうか言ふ事に於ては、あの幼児に相應しく低められて居ります。基本目的——それが幼児教育の目的になつて居ります。同じ吉田口なり御殿場なりに兄弟が登山を志して泊つて居ります。折柄お山は快晴、今日こそ山に登る可き朝だ言ふ時に、一番上の兄貴は、

もよより絶頂迄行く事を目的とする。一番小さい子供は、富士山に登る云ふのではあるけれども、初めからその小さな足跡な子供を絶頂に連れて行かうとは誰も思はないので、何れ大きくなつたら絶頂に連れて行くけれども、今は一合目迄云ふに定つて居る。それを無理に、小さい子供も大きい兄貴と同じに絶頂迄ぐんぐん張切つて登らせようとするれば、それは無理であり、無茶である。そこで、幼児たる小さい子供には「お前は富士登山を目的とするが、今は一合目を目的とする」と言ひきかせますし、それで本人も納得する譯であります。さうして恐らく、兄貴が絶頂に登つたと同じ位の氣持を、一合目で充分味はひ得るであります。この譬が示します如く、幼児教育の目的は、幼児を幼児として何所迄持つて行くか云ふ意味に解釋した時に、あの幼稚園令第一條の目的が出て参ります。そこで、若しも皆さんが、あの幼児をあれ以上高いところに、無理なところに連れて行かうとなさるならば……私共は常に誠め合つて居りますけれども、然し皆さん御自身教育者として幼児の人生に對して持たれる希望はまあ心身が相當健全ならば宜からう、善良なる性情が漠然と養はればいゝ、云ふ事ぢやない。若し幼稚園を出まして、相當な年になりました子供が、皆さんのところにお禮に來まして「爾來心身極めて健全、善良なる性情を涵養されて、そこで止つて居ります」と云ふのであつたならば、これは甚だ、喜ばしい事ぢやない。幼稚園のところではあれを自當てにして居りますけれども、然しあの子供を、終ひにはここに到らせようか云ふ教育目的としては、皆さんはぐんぐん高いものを持つて居られるのであると思ふのであります。このところを私は、分り切つて居る事でありませぬ、今回はハッキリ確めて見度いと思ふのであります。

○

幼児を幼児として何所迄持つて行く可きか云ふそのきまりも、皆さんが、あの子の將來をどんなものにしようか考へていらつしやる人生教育の目的は、必ずしも一つぢやありません。その問題に就て、又こんな事が考へられると思ふ

のであります。

若しも皆様か、あの幼児を、人間として國民として、どこまで究極に持つて行かうかとする目的の高きものがないならば、幼稚園の目的も、あの通り書かなくても宜しいかと思ふ位であります。若し皆様か、教育目的として非常に程度の低いお手柔かなことしか、人生に於て考へていらつしやらないとするならば、幼稚園令は、斯う書いてもいゝんです。「承る」ところによれば、保母さんの人生目的は幼児相當の程度に過ぎざる由、さうかそれを然る可く幼児にお與へ下されば、決して過ぐるところなる可く、宜しくおやり下さい」斯う言へば宜しい。けれども事實は反對でありまして、皆さんはあの幼児を、つてもない高い所に連れて行かう云ふ教育目的、人生目的の所有者であるから、危険で仕様がなないのであります。小さな小さい子供を引張つて、兎に角ぐんぐん自分の足に任せて絶頂に連れて行かうとする危険が非常に多いのであります。そこで態々今度斯う云ふ言葉で現す。皆様か幼児を連れて行かうとする行先は、實に世にも遙けきものを目指し乍ら、今お連れ下さるものは幼児である事をお忘れなく、何分までもお手柔かにお願い致し度い。

そこで「心身を健全に發達し、善良なる性情を涵養する」云ふ基本性のところに皆様の目的を喰ひ止めて置かうとする、斯う云ふ必要があつてあれが出て居ると思ふのであります。まさか皆様は、幼稚園の子供とその日暮しに遊びほうけて了はうとする方ぢやない。若し遊びほうけて了はうとするそれだけの……夜が明けて日が暮れ、ばい、云ふ丈であるならば、あの幼稚園令第一條の目的も、皆様を彼所迄目的に於て引張り上げて來る意志になりますけれども、決してさうぢやない。皆さんがえらい高い目的を持つて、熱情の迸り、熱意の盛なる……さうかして幼児をグツミ引張つて行かうことなら、うごも限らない時は、上級でさせるかも分らぬ云ふ様な事を幼児に要求され兼ねない。御熱心な方のお揃ひですから……。

こんなこゝは、餘り當り前の事でありますから、何を言つて居るか却つてお分りにならないかも知れませぬが、詰り皆様が生目的の高いものを持つて居る人だから、それを認めて尊重して、けれども幼児に向けていらつしやる時はこの程度でおいて下さらなければならぬのであります。これをお願する意味で示して居りますが、あの幼稚園令の示して居る幼稚園の目的であります。

若しさうならば、あの幼稚園令が示して居ります基本目的云ふものは、幼児を幼児として教育する時のあの要求であります。幼児を幼児として教育するその要求云ふ事は幼児を幼児として置く云ふ丈の意味ではなくて——それなら又極めて簡單であります。皆さんが終ひには幼児を連れて行かうとする最高の目的に聯關して居るものでなければならぬのであります。「お前はまた小さい子である、絶頂に登る云ふ事は早過ぎる、だから下のところに居ろ」と言つて、マイナス一合目なん云ふ處に連れて行く必要はなからうと思ふ、又、「絶頂に登るなんて生意氣だから、此處等をブラブラ廻つて居ろ」と云ふのは餘計であります。だから目指す處は爪先上り、向ふに上つて居るのであります。方向は一定して居るのであります。その方向が一定して居つて、その幼児を云ふ對象に屬するのはさう云ふのか、云ふので、あの幼稚園生活のあの目的が改良されて、あゝ決めてある事になつて居るのであります。

斯う云ふ事を改めて申上げるのは、皆様若し幼稚園に於て、教育者としてあすだけ以上の何も持つていらつしやらなかつたならば……何と申しませうかな……御氣樂な事で御座います。誠に御氣樂な事で御座います。誠に御座います。斯う云ふ事を言ひ度い爲であります。時々お目にかゝる方に御様子が餘りスマートなためにさう見えるのかも知れませぬが——相當ケロリとした方を屢々お見受けします。「幼児を教育する……何、一寸心身を健全ならしめて置けば宜しい、善良なる性情を基本的に一寸涵養して置けば宜しい、薄色に染め上げて置けば宜しい、それだけよ。それ以

上しろこも言はないし、私だつてしようこも思はぬし、幼児教育では先生も幼児的である」こ、いこも可愛らしい顔をしていらつしやる。(笑聲)これで、幼稚園令が示して居る要求には合しますから、それで結構です。それが逆で「きうも日本の幼稚園令は實に人を馬鹿にしたもので、あんな程度で我慢出来るもんか」こ云ふ熱烈慷慨悲憤の保姆諸君が幼児を捉まへて「心身健全以上、尠くも双葉山程度、善良なる性情涵養以上、尠くもえらい宗教こえらい藝術こえらい道德こを持つて居る者迄に、私はこの子が學齡に達する迄に、そこまで仕上げて了ふ」こ云ふ熱烈な方があつたら、幼稚園丸焼けになるのであります。實に幼稚園が焦げて了ふのであります。(笑聲)熱くて仕様がな。それに較べれば、何時も涼しく、幼児を幼児として取扱ふミ言うてケロリしていらつしやる方が間違がありません。イヤ、物事は、萬事、なんで御座います。控へ目で御座います。腹八分目で御座います」こ仰言るから「あなたはよく八分目でいらつしやる」こ言ふこ「私は食欲が御座いませぬ。胃が弱う御座います」こ言ふ。それなら八分目もちこもえらくない。食ひたきは食ひたきなり、今實に食ひ度いが、今の任務上そこにおく。ミ云ふのでなければ意味をなさぬこ思ふのであります。

○

私は斯う云ふ事を一結論として申上げ度い。きうも幼稚園ミ云ふものが、何もなく方法的に幼児に適するこ云ふ事を以て、幼稚園の全部になつて了つた、その幼稚園の中に先生が居り、その先生が持つていらつしやるべき筈のものが少し足りない——ではないかこ。私はよく、ミツシオン系の幼稚園に就て何んのかんのこ云ふ批判を下す事があります。又お寺さんの方でやつていらつしやる宗教主義幼稚園の場合に於ても、相當非難を試みる場合があります。それは屢々——後で又申す事がありますが——その先生の高い宗教生活に迄子供を直ぐに連れて行かうミ方法的に誤る危険があるからです。そこを警戒するのであります。然し乍らさうは申しますけれど、あの宗教的信念をバックにして居られる方がやつてい

らつしやる幼稚園には、方法的に間違が起る危険は往々ありますけれども、速にその教育そのものゝバック、その従事してお出でになります先生方の信念の上に、幼児に臨む前に持つて居るえらいものがありますので、速にそこは立派な幼稚園だと思ふ事が度々ある。方法的には少しきつ過ぎるな、と思ふ事もありますが、それ程にそのミこころは實に教育が相當の濃厚さをもつて居るのを感じさせられる。これに較べまして一般の幼稚園——宗教ミ云ふだけではありませぬが、さう云ふ何等特殊性のない場合に於きましては、方法的には實に素直であり、幼稚園らしい方法がみられて居つて、幼児はいきも樂々にやつて居りますけれども、それ以上何物もそこない事を感じる事があります。そこに幼児教育の心理的正しさがあるだけで幼児教育の心理學的方法的正しさがあるだけで、教育的偉大さも、教育的熱烈さも、教育的にその幼稚園を生み出して來る原動力も感ぜられない場合があつたりします。あつさりした幼稚園、さつぱりした幼稚園、そこには幼児を、その心理的特質に於て即ち幼児の弱さに於て間違なく心身を健全に發達せしめ、善良なる性情を涵養するミ云ふ、一種の自然主義的の正しさがあるだけで、教育的な何の理念がそれを支配して居るかミ云ふ事になつて來ますミ、まあ極言すれば極めて他愛のないものが少なくなかつたりするのであります。

○
私は外國で色々、所謂非常に信念のある人のやつていらつしやる幼稚園を見ました。その時に、口では言へませぬが、そこでは決して無理な無茶な事をやつちや居らない。實に幼児に相應しい方法を、いきもなだらかに素直に愉快に、實に幼児の花園ミして作つて居られるのでありますけれども、何だかサムシングデア——世界教育會議が近付きますのでちよいといく英語が出て申譯ありませぬが——（笑聲）——他のものが、何等か感ぜられるこころがある。

フレーベルミ云ふ人は、兒童の自己發達ミ云ふ事を認めて、その自己發達の心理的意義を發展させて、それによつてフ

レーベル獨特のキンダーガルデンを作つたのであるを謂はれて居ります。——確かにさうであります。この點を捉へてフ
レーベルを論ずる教育史家は、フレーベルを心理學派に置きます。教育史上に於ける心理學派の中にフレーベルを入れて
居ります。けれどもフレーベルの幼稚園はそれだけのものぢやない。幼稚園は自己活動に基いてそこから出て來たのであ
りますけれども、フレーベルその人の教育は、もう少し他のものから出て居ります。早い話が、フレーベルの「人の教
育」を御覽になります。いきなり自己活動「お、園よ園よ園よ、……」を書いてあるかと思ふさうでない。初めは人生
論が哲學的に八釜しく書いてある。神と一致、人と一致、自然と一致、この三つを以て教育の大きな目的として居ります。
その目的を持つて居つての自己活動の尊重なのであります。若しもフレーベルのその方面を主にして、フレーベルを味ひ、
研究するならば、教育史の上でフレーベルは心理學派に屬するよりも、哲學派に屬すると言ひますか、一種の理想派に屬
する人であります。こゝの點を私はよく考へたい。

○

世間では、幼稚園云ふものをどう見て居りませうか。世間が幼稚園をどう見るか云ふ事に就て、そんなに氣にする
譯ぢやないが、幼稚園云ふものゝ主義から得られる認識が、勿論世間の人は何も分りませぬから、折角皆様が御苦勞に
なつて居ります事が分らぬであります。けれどもこゝによつたらば、幼稚園を百パーセント一杯に理解して見たこ
ろで、こゝに幼児生活の自然があるだけであつて、そこに崇高なる、仰ぐ可き教育が、目的々に先生に於て持たれて居
る云ふ事がないならば、世間は幼稚園を軽く見ます。この意味で、私は幼稚園云ふものゝ中では自然的にやつて居
ますけれども、その自然的にやつて居りますバックには、矢張り大きな教育目的、人生目的があつての事である筈であ
り、なければならぬものだ云ふ事を考へ度い、それが今回のお話の筋であります。但し私はこのお話に於て、非常な危険

を思つても居ります。折角く皆さんが、あの幼児ミはかけ離れて居る程の高い人生目的を、ぢつミ藏つて置くか胸の中に入れて置くか、一番便利なのはハンドバックにでも入れて幼稚園に持つていらつしやつて、さうして而も幼児には幼児に相應しく、幼児ミ云ふだけであの通り幼児の様になりきつていらつしやるその御苦心を、私が今度言ふ様な事を餘り力説して行きまして、皆さんが幼児から元に還つて、幼児から離れて了ふミ困る。教育なればこそ無理な……無理こそ即ち教育なれ、ミ言つたやり方にかへつて了つては實に大變です。これは非常な危険を感じるのであります。若しさうなりますならば、幼稚園を幼稚園ミして建設して行く百の理論も、今迄の御研究も、實に一朝にしてフツ飛んで了ふのであります。けれども私は此處で斯うやつて皆さんにお目にかゝり、皆さんが幼児の方に即して行く事に於ては、決して決して、それを失ふ様な危険の無い方である事を信する。皆さんは金輪際幼児から離れない人であります。それで私は安心して今度のお話をします。

一體幼稚園の保姆ミ云ふ方は幼児にくつゝ天才であります。教育をしようミ思つて幼児のミころに行つても、つひ幼児にひかされて了ふミ云ふ天才である。衛生を守らうミ思ひ乍ら、お饅頭を見るミ直ぐに手を出す私の様な天才であります。(笑聲)そこでその元來の天才が、幼稚園は幼児の方にギョツミ行かれることに就ては少しも懸念しないでいゝであります。が、若し萬一にも、教育目的論を本體として、それで幼児をさうする、教育目的論そのものでさうするミ云ふ事になつたならば、これは非常な危険であります。私達が常に口を極めて攻撃致しますあの誤れる幼児教育になつて仕舞ふのであります。さういふ幼稚園は幼児の幼稚園でなく目的の幼稚園になつて仕舞ふ。即ち、教育目的ミ幼児ミの間に、幼児教育者を挟まないやり方であります。教育目的、幼児、それを横から眺めて、何か此方ミ結びつく様にする、さう云ふやり方……中には、幼児ミ教育目的をゴムの様に思つていらつしやる人がある。幼児の方に目的を引張り、目的の方に幼

兒を引張つて居る。さうしてこゝでくつ付けて、幼兒生活に教育目的に此處で合致せり、と言つて居る。さうして、離れるにバチンに戻つて來る事になる。或はそれを離さないで結びつけるに幼兒の方がバチンに、目的の方に行つて了ふ。幼兒は教育せられたり、然し幼兒は失へり。皆さん、さう云ふ幼稚園を御覽になる事があると思ふのであります。「教育目的をやつたから見に来て下さい」「言ふので行つて見るに、幼兒は其處に一人も居ない。教育目的のお化の様なものがあつて、「幼兒は何處に居ります?」「言ふに「昨日迄は憐れむべき幼兒であつたが、本日からは教育目的の權化になつた」と仰言る。(笑聲)さうするに、これは容易ならざる事である。「これは、目的幼稚園、天上幼稚園、幼兒の幼稚園でないんですね」。と言つてもその方は分らないで「折角骨を折つたところを見てくれ」と仰言る。さう云ふ事になるのは實に困りますから、何所迄も幼兒を幼兒として、みんなによくやつたところで、心身健全の發達に、善良なる性情の徵けき涵養位のところに置かうとするのですけれども、さあ又それだけでいいだらうか。教育目的に云ふものには、もつと高いものがある筈なのに、斯う云ふ事を考へ直す必要があると思ふのであります。

この意味で、私が今迄多く餘り觸れ度くないと思ひました或は道德に幼兒との關係、或は藝術に幼兒との關係、或は宗教に幼兒との關係、そんな風なところを今年は少し扱つて見たいと思ふのであります。幼兒の生活を如何にしながらに生かさうか、云ふお話を、私は捨てたんぢやありません。捨てるどころぢやない。それを基礎にして、それに信頼して、それがあつたことを安心すればこそです。けれども又人生の文化には、あの高いものがありますから、それ幼稚園の間に考察をもつて行く事も必要である、斯う考へるのであります。

若しこれだけの前置を置いて、名前をつけますならば、今度のお話は幼稚園の文化的考察と言つても宜しいのであります。幼稚園の心理學的考察に對しまして、幼稚園の文化的考察にしても宜しい。唯然しこんな題を先に出しますと實に危

險になりまして、折角く吾々が、そこにこそ幼稚園の幼稚園らしさを置かうにして居ります幼児の自然が、ぶちこはされて了ふ。造り花許り絢爛に咲いて、眞のない花園が出来たる事を畏れますから、斯う云ふ題を出さうとせませぬ。たゞ幼稚園云ふものは、私共が何時も申します如く、小さき苗のころをやつて居るのですけれども、その究極の目的は、實に絢爛たる満開の文化云ふものが、遙けき向ふにあつて、それと繋つて居るころがなければならぬやないぢやないか申すのであります。こんな意味で、さう云ふ文化的の問題を少し取出して、御一緒に考へて見ることにいたしませう。

第二 道德教育

その第一としまして、今日は、道德教育云ふ問題をこゝに出して置きます。「道德教育」云ふ言葉は、これは幼稚園の言葉云ふよりも、教育全體の言葉でありまして、詰りまあ大きな言葉であります。吾々は、相手が中學生であらうと大學生であらうと、又は幼稚園の子供であらうと、それに向つて道德教育をしようとするのであります。唯その道德教育云ふものゝ持つて行き方は、その年齢のころで違つて居る。これは申す迄もない。然しその道德教育云ふ事その大きな狙ひ所、これをもこにせませぬと、幼稚園に於ける教育も、極く目の前的な、その場的な、或は殆ど教育としてのその深さを持たない云ふ様な事にもなります。

そこで、先づ道德教育云ふ事を問題に致します。その道德教育云ふ事を問題にするに就きまして、道德教育云ふ教育學上の問題をその儘研究する事は、これは極めて大事な事ではありますが、少しこの講習としては根本に入り過ぎませう。即ち倫理學全體のお話になる云ふ譯であります。そこで、此處では、幼児教育へ始終關係を持ちまして、その關係の一なる點に於て道德教育を考察して見る事に致します。

○

そこで道德教育云ふものは、要するに人間をして道德生活を全からしめる事であります。全からしめる事ではあります、その道德生活を全からしめる云ふ事は、二つの意味を持つのであります。一つは横に擴つて……云申しますか、道德生活云ふものゝ中に含まれる所のあらゆる方面、色々な方面——或は親に孝行でありますか、友達に親切さか、實に澤山道德がある譯であります、かういふ方面を考へる外に道德生活としての純粹生活云ひますか、斯う云ふものを一ぱいに純粹に持つて居れば、一種の完全なる道德生活云へるこいふ方面があります。即ち徳目的に、あらゆる事に於て落度のない人であり、缺陷のない人であつても、その生活態度を根本に置きまして、道德的云ふ言葉に完全に相當せられない様な所謂不純なるものがありましたならば、或はそこに弱いものがありましたならば、これは完全なる道德生活をして居る云へないのであります。

即ち道德生活の大事な意味は、その場々、その事々に於て、さう云ふ風な事を適切に正しく間違なくやつて行くか云ふ意味のみならずして、道德生活そのものゝ根本的態度云いふものが非常に大事な問題になつて來るのであります。そこでその擴りに於ての各様の道德生活、その一つ々々のこゝは此處で一々問題にして居られませぬが、根本の態度の方の問題に就て考へて見る事が出来るのであります。

そこでその道德的生活、即ちつまり善をなすのであります、その善をなすに就きまして、根本態度として是非欲しいものが色々ある。その態度の本當のこゝろをさう云ふ風に考へるか云ふ事をハッキリして置きませぬ、即ち幼兒教育を其方へ結びつけてして行く事が巧く出来ない様になるのであります。

態度云ふ事で、もう一度申します。人間が——まあ、お互が、云つてもいゝのであります——正しい純なる生活

を道徳的に誤りなくなし得るか否うかは、勿論此方の道徳態度如何によりますけれども、然しそれが實現する事の巧く行くか行かぬか云ふ事は、外の事情だの色々の事に依るのであります。言ひ換へれば嘘をいはない人が、必ずしも生活態度に於て本當に道徳的であるに限りませぬ。或は嘘を言ふ人が、その嘘一つに於てその人の道徳生活が盡く失はれることも限りませぬ。言ひ換へれば、その嘘を言ふか正直をやるか云ふのは、その色々の事情に依るのであります。まあ謂はば樂々正直の言へる事もありますし、正直を言ふには非常に骨の折れる事もありませう。のみならず、斯う云ふ事さへもあるであらうと思ふのであります。生活態度そのものが極めていゝ加減であるが故に、樂々正直が出来て行つて、生活態度そのものが本當に道徳的であるが故に、そこでやつて居ります事では、正直が樂に出来ない云ふ事もあるかと思ふのであります。我々が恥を知らず、人に迷惑をかけても平氣である云ふ態度でありましたならば、多分樂々あらゆる場合に正直で通して行けます。然し餘り恥を知つて、自ら正直にして行く事の辛さが深刻である場合には、そこから嘘を言ふかも知れませぬ。普通は、逃れる爲にするく嘘を言うて居ますけれども、さう許りとも限らぬかも知れませぬ。或は又、人に迷惑を及すことを恐れてその細やかなる氣持から嘘を言ふかも知れませぬ。例へば人が、或事を斯うだと言ひました。それは嘘だと思ふけれども、その人がさうだと言つて居る氣持を深く感じれば、それに向つて、いゝえさうぢやない、こはサラ／＼言へないかも知れませぬ。數學なら何でもないのでありますけれども、生活では、もう一つその細やかな味のあるところが出て來る譯であります。

さう云ふ譯で、その態度そのものが非常に重要な點になつて來る。殊に道徳を道徳として研究して、さう云ふ道徳がよくてさう云ふ道徳が悪いか云ふ事を、倫理學に云ふ形で比較研究して居ります時には、いゝ道徳はいゝし、悪い道徳は悪い云ふ事に決つて居りますが、又道徳を道徳として細かに穿鑿して行けば、それで濟むのであります。道徳教育

「云ふ事になります云ふ事、その道德そのものゝ問題ぢやなくて、それをその人間がどうするか云ふ事の、そこに問題があるのでありますから、態度云ふ方面が重要な事になつて来ると思ふのであります。

そこで「善良なる性情を涵養し」云ふ事は、即ち一種の道德教育の大きな基礎に相違ありません。幼ない時から、善良なる性情が涵養せられる事なくして道德生活に發展して行く事はないのであります。又、心身が健全でなくして、道德生活に發展し得る譯もないのであります。その心身の健全を、善良なる性情を持つて居る云ふ——こゝが一寸面倒な考へ方でありませんが、健全なる心身を善良なる性情を養つて置けば、そこから必ずいゝ道德生活が芽を出して來て發展して、生長して行く云ふ確信を、同じく幼児教育者にして持つて居りますから、餘計な事を餘りヤキモキ道德教育の中に於てしないで、あそこの基本教育をよくして置けば……泥を耕してよく苗を植ゑて置けば、そんなにヤキモキしないで、花が咲くに確信して居る様なものであります。然し乍ら、それはさうでありますけれども、吾々は教育者でありますからして、さうやつてその自然の發展を安心して居りますだけで、此方の氣は濟みませぬ。濟まない筈であります。此方は氣持の中で、その子供の道德生活へ終始中結びつけて考へて居ます。こゝがまあ今度の話の要點であります。若し斯う云ふ人があつたらさうであります。「心身を健全に發達し、善良なる性情を涵養する」云ふ事が幼稚園令にしてある、それだけ兎に角やつた、あなたはもういゝ。これでさうかなるだらう。——例へば鳥を耕して苗を植ゑて、あゝして置けば立派に花が咲いて實が成る筈であると言つて、家へ歸つて高枕で晝寝して居られる人は、そこへ來てはそれ以上の事は出来ないのであつて、基本教育でありますから、そこへ來てヤキモキするのはよくないから高枕で寝て居るのでなく、終始中それがさうなるか斯うなるか云ふ事に就て心配して、隨てその生活を斯うして置けばこれでいゝんだ云ふだけでなくて、それを積極的に完全なる道德生活へ持つて行く事は基本教育にして許しませぬけれども、せめて消極的に道德教育に

向ふ様に……尠くも向はないものを、邪魔になるものを退ける云ふ工合に始終そこに意を拂ひ、氣を配る云ふ事は當然な事であらうかと思ふのであります。昨日申しました、今日の幼稚園の一つの傾向が餘りに心理學的に、餘りに基本教育的傾向であつて、そこだけやつて居ればあこは幼児教育に關するところに非ず云ふ様な事は、これは今日の幼稚園をして實に微力ならしめ、實に無價値ならしめて行く一つの理由になつて居るのぢやあるまいか、これは餘り、道德教育こそその他の大きい目的で引張り過ぎましたから、方法的の誤りがありました。今日は方法的の正しさを考へる事が密であるから、行き過ぎる誤謬はないけれども、何だか幼稚園が、心身を健全に發達せしめ、善良なる性情を涵養して置けばそれでいゝ、そこだけであつて、あこは私は知らぬ云ふ様な趣きがあるんぢやないか。又若しあつたならば、それが幼稚園教育者の仕事を軽く世に見せる事になるんぢやないか、こんな事も申しました。そこで、さう云ふ意味で道德教育を云ふ大きな目的の方から、あの幼稚園の子供に對する吾々の氣持を見て行かうとするのであります。

○

その場合に色々な事が考へられると思ひますが、道德教育——即ち生活を道德的態度に養つて行かうとするに於きまして、先づ第一に重要な事は、眞情、云ふ事であると思ふのであります。或はこれを完成した所迄行きますれば、「誠」もか「誠實」もか云ふ非常に高い、又完全なる道德觀念に迄築かれて行きますが、尠くも眞情云ふ事であると思ふのであります。詰り「誠實」云ふ事は、その形から見ます云ふと、結果から見ます云ふと、偽りない云ふ事であります。然し生活態度の方から見ますれば、それが本當にその人の中から出て來て居るかさうか云ふ事でありませう。道德は、實に澤山色々な高尚な事があるでありませうが、若しその人の本當から出て來ないものならば、これは道德生活として完全なるものでない事は決つて居ります。そこで幼児からその色々な道德が、本當に自分の中から出て來る様な生活態度、こ

れを吾々は幼児に養ひ度いのであります。こゝらの事は、改めて申す迄もない分り切つた事であります。その、本當に自分から出て来る生活態度を養ふ、これは皆様は餘りいゝ子供達を知つてお出でになり、皆さん御自身が既にいゝ教育をしてお出でになりますから、餘りに知れ切つた事でお分りにならぬと思ひますが、時に誤れる教育に於きましたは、道德教育云ふ事を此方が考へる爲に寧ろ反對の結果の起りさうな事をやる事が多いものであります。

云ふのは、即ち例へば唯外から、斯う云ふ時には斯うすべきである云ふ道德的處理と言ひますか、處置と言ひますか、仕方と言ひますか、さう云ふ事を教へる場合が尠くないのであります。吾々は子供によく「さう云ふ時には斯うするものよ。」斯うするものよ、云ふ言葉を使ひます。斯うするものよ、云ふ言葉は、——言葉に捉れるんぢやありませんか、大變に立派ないゝ事でありませうけれども、さうすべきものなんだからさうする云ふ傾向が直ぐにその通り訓練される譯ではありませんが、さう云ふ風に養はれて行くさう云ふ暗示を受けられる事に依て、折角中から出て來ようとするものを出させないのであります。

第二には、子供が實際中から致しますあの不完全なる道德生活を、實は誠でやります。やりますが、その誠でやりましたものを、直ぐに意識の上に乗せて來る云ふ事が、吾々のやり方で、即ち折角子供が唯自分の中から出て來た云ふところで、そこで始めて道德的態度になつて居るものを、直ぐにその道德をもう一度子供に意識させるのであります。幼稚園の場合に於きましては、極めて善良なる事がフラツミ出て、自分に氣がつかずにスツミ消えて行く事が必要だ云ふ事は、私は何時でも申して居るのであります。そのフラツミ出てその儘消えて行く云ふ事は、何故そんな、火花が消えて行く様な、風が吹いて何處かに行つて了ふ様な淡い事を求めるかと言ひます。自分から出ました道德をもう一度掌に置いて

て眺めて見ます。……眺める云ふ事は、これは道德そのものとして考へる事になるのであります。詰り自分の生活を批判する事になります。青年等に於きましては、大事な事でありませうが、自分の生活を批判する事になる、批判する云ふ事は、大事な事ではありますが、青年は批判しなくちやならぬ、大人もさより批判し反省しなければなりません。批判する云ふ事は、その道德を間違なきものにして行く道でありますけれども、そのまごころに對しては、批判云ふ事はある動搖を與へるのであります。例へば、草がつつみ生えて居ります。心なく、唯生えて居ります。生えて居りますが、これがごうしようが——おかしな例ですが——草自ら、自分は生えて居るだらうかき考へて、自分を揺ぶつて見る様な事をしましたら、その根はぐらつくのであります。批判は即ちその根のまごころに動搖を與へて來ます。その根のまごころに動きを與へて來る云ふ事は、その、今出て居ります道德生活そのものを、根のしつかりしたまごころから動して行く云ふ事で、既に危険な事であり、望ましくない事である。のみならず、さう云ふ風な傾向が一回の批判で、次の批判、一回の反省で次の反省を養はれて行きますまごころでない中に、先の危険があります。これは大人によくある事であり、何も自分の中から出て來もしないのに、先の事を考へて居ります。詰り道德を道德として考へ、それを唯理論的に研究して居るならそれだけです。その研究的、批判的の云つた様な事を、自分の中から出て來ますものに加へます。出て來るそこよりも、出た後の事の方が問題になつて來るのであります。これが然し大人の場合ならばもう自ら出る云ふ真心がしつかり養はれて居る後ならば多少の批判を加へた正しい眞心そのものがぐらついて來る云ふ事は決してないのであります。まだ極めて弱い出方しか出來ない幼児の場合に於きましては、これは非常に危険な事になるのであります。

さう云ふ意味からしまして、この自分の生活を外から、斯う云ふものだ、斯うすべきものだ、その場合につけて教へられて行きます事や、或は自分から出たのであつても、その出た所の、出たまごころ事實に一杯になつて居ないで、直ぐそ

れをもう一度自分で批判するに云ふところに行く傾向、斯う云ふ風になりますに云ふに、その子供も決してその子供が善良なる性情に云ふ様なところは、そこで出来て居るんですけれどもその道徳的生活態度そのもの、根本に於きまして、正しい方に向けて居るに云ふ事は言へない事になるのであります。幼稚園の訓育に云ふ場合に於ては、道徳が、他の生活活動と共に自發する事を主體に致します。その自發に云ふ事は、唯出て来るに云ふ丈の心理學的の意味であります。然しこれが唯心理學的にさう云ふものが出て来るに云ふ丈ぢやなく、その持つて居る倫理價值、中から出て来るに云ふ事が、出て来る丈ぢやなく、出て来るに云ふ、實際に自分から出て来るに云ふその倫理價值、そこに目をつけて來ますに、誠に真心に純心理的なものに止らざる倫理的・道徳的のものになるのであります。それ迄の事を私は始終考へて居なかつた。唯、善良なる性情の中には涵らして置きましたにしても、本當に道徳生活への教育を今こゝで、その初歩的なところでやつて居るに云ふ事は、正しく行はれなくなつて來るのであります。その真心、その誠、斯う云ふ風なものを非常に大事な問題に考へるのであります。この真心に誠から云ふ事に就きました、吾々が特に氣をつけなければなりません。子供の方は實はさう云ふ他の事は兎に角、眞心的な傾向を持つて居るものでありますから、それが自然に導かれ、ばさう云ふ様な傾向になつて行くのであります。私の道徳觀に云ふものが、その真心に誠から云ふ所にぎれだけの本當の價值を置いて居るかさうか云ふ事が、非常な影響を與へて來るのであります。吾々自身の道徳觀が、その誠、真心、さう云ふ風なものから充分に出て居るかさうか、詰り結果の上に於てよくても悪くても、誠から出て來て居るもの、さうでないものに就て本當に嚴格なる神經を吾々が持つて居るかさうか云ふ事が、これが非常な大事な點になつて來ると思ふのであります。私は、幼稚園の先生が幼兒をよし惡しき品定めして居られる時に、その幼兒の行や形や結果等を通して、その人間そのもの、道徳的生活態度を批判してお出でになる時に、その先生自身が、真心に云ふ様なものに就てくれ丈の

厳しさを持つて居るかに依て、その批判がそこで違つて來ます。その先生の良き云ふ子供が、他の事では成程良いし、勿論善良なる性情位は涵養されて居りますが、真心云ふ事に就てきうも純でないのを見逃してお出でになる場合……他の事では實にやんちゃで駄目で亂暴で、所謂結果の上では道徳的ではないのでありますが、何所迄もそれが真心であり、誠である云ふ點を非常にしつかり見付けて、そこに、他の事はきうでもいゝ云ふ程の値打を置いて、その子供を、良い子ミか悪い子ミか御覽になる場合ミ、これは大きな違になつて來ると思ふのであります。

○

善良なる性情ミは、必ずしも其所迄の厳しい事を申して居るものではありません。然し乍らさう云ふ厳しさを以て子供の道徳生活を見て居て下さる先生か、さうでないか云ふ事は、その子の善良なる性情云ふ程度ぢや大した事はありませぬが、將來の道徳生活への本當の態度ミしては、非常な影響を與へると思ふのであります。これに對して真心云ふ様な事は、中から出て來るのであります。若し言ふならば、日本精神に於ける道徳の本當の價値云ふ様なものに於ては、この真心云ふ誠云ふ事を非常に重んじて居るのであります。その結果がきうであるか云ふ事にのみ重きを置くのではなく、その真心、誠云ふ様な、其所へ非常な重きを置いて居るのであります。ですからこれは、日本的な言葉であると言つても宜しいのであります。所がその真心云ふ誠云ふ日本のそれを、もう少し形を變へまして、その人間の間に、真心云ふ誠云ふのは極めて單純なるその人間の中から本當に出るか出ないか云ふだけの話であります。それをもう一つ理論づけまして理窟づけまして、日本的ものを考へる時には、餘り理窟づけない、素直に見て行く傾向であります。それをもう一つ理論づけまして來た時に、真心云ふ誠云ふ言葉が、良心的云ふ言葉に置き換へられて來ます。良心的云ふ言葉は、支那の倫理に於きましては良知云ふものであり、ヨーロッパの倫理に於きましてはコンシ

エンスミ云ふものでありまして、これは真心ミ云ふ日本人的な、素直に、涼しいから涼しい、暑いから暑い、氣の毒だから氣の毒だ、ミ云ふその真情だけでなく、さう云ふ生活が心の中で行はれて行きます手續を分解して、さうしてそこに良心ミ云つた様なものを考へ出して來て、さうして良心的ミ云ふ言葉を使ふのであります。ですからこゝで真心ミか誠ミか云つて居ります事が、餘りにパーツミして居りますならば、これをもう少し考への上で固めて來た、良心ミか、良心的ミか云ふ言葉に置き換へて下さつても宜しい。唯こゝで言ひ度い事は、良心ミ云ふ様なものになりますミ云ふミ、これはもうそれ自身が段々發達して行くものでありまして、良心そのものミして非常に立派な純なる良心を持つミ云ふ様な事は、これは矢つ張り道德修養の後の話であります。良心が嚴格に純に完全に、道德生活を統制して行くミ云ふ様な事は、これは倫理生活、道德生活の全部發達した後の事であります。真心ミか誠ミかはそれも含んで居りますが、後だけではなく、初めの極く幼稚な、或は原始的な……ミでも言ひ得る事であるのであります。

そこで、良心ミ云ふミ大變難しい事になりますからして、此所で、良心的ミ云ふ言葉でものを和らげる、その子の生活が果して善良なる性情の中に美はしく涵つては居りますが、然し言ふ事する事總ての生活態度が、果して良心的なりや否やミ云ふ事は重大な問題であります。

そこで幼児の道德教育ミでも言ふ場合に於きましては、その子供を良心的なるものに導いて行くミ云ふ事は、良心を完全なるものにするなんミ云ふ事は出来ませぬが、良心的なる方法に持つて行くミ云ふ事は非常に大事な事であるのであります。勿論繰返して申しますが、幼稚園の所でそんな事が完全に出来るものではありません。だからそこでは、そんな事を幼稚園の目的ミしては必ずしも第一に掲げ、求め、要求して居るのぢやありません。道德教育ミ云ふ様な大きな目的で子供に向つて行く時に、吾々は先づ第一にその良心的即ち子供の生活の方にその儘出て來る方から言へば、真心

さか誠さか或はそれが生活さしてぎんなであるかさ少し研究……言ひますか、考へた後の話さして、良心的さ云ふことに行つて宜しいかと思ふのであります。即ち幼児教育に必ずしも良心の教育をしろ、さ云ふ事はありませぬ。そんなえらいことを求めませぬ。唯、善良なる性情を涵養し、心身を健全に育て、行けばいいので、そこから良心的なものも出て来るんですけれども、何が出て来るか知らないが、何れいゝものが出るから、わたしは地均しをして、あまはサッサミ引上げて行くさ云ふのでは、餘りに激しい。——幼稚園の庭に、花壇を作つて居ります。それは外から泥を持つて来て拵へる。そこにもつて来て他所から持つて来たものを植ゑて居りますが、泥を作る人は泥だけ作ればいいさ云ふ丈ではさうかさ云ふ問題であります。而も私は今迄、善良なる性情そのものを養つて置きさへすれば、心身を健全にして置けば、後で必ずいゝものが出るが、その基本をちゃんとして置かうぢやないかさそつちを主にして考へましたが、幼稚園さ云ふ中では、そこより一步も進める事は出来ませぬが、吾々さしては、教育者でありますから、そこで子供に向つて道德教育を矢張りしたのであります。道德教育を、幼児の場合に於ては、先づ良心的さ云ふ様な生活態度に持つて行かうとするのであります。

先程、中から本當に出るさ云ふものを無暗に意識させたり、批判したりさせますさ云ふさ、それが却つて崩れて来て、所謂花は咲いて居るが根の浮いて居る植物、さ云つた様なものになるさ斯う考へましたが、その良心的さ云ふ様なものに言葉を換へて來ますさ、良心さ云ふのは、自分の中に自分でないものが一つあるさ考へた考へ方であります。眞心さ云ふのは、何か、このものそのものさ云ふ考へ方であり、良心的さ云ふのは、自分の中にもう一つ自分を支配する何かさあるさ考へるのであります。その支配する力強いものを養つて行く、そこにさんな問題が起るかさ云ふ事であります。

この事に就きまして極く實際の問題としては、こゝに賞罰云ふ問題が出て來ます。子供が生活をして居ります時に、それでいゝか悪いか考へて御覽なさいと斯う云ふのがさつきのお話でありましたが、もう一つ道德生活に於て通有的に使はれて居りますのは、賞罰であります。これに就て、實際的なお話になりますが、賞罰云ふ一つの問題を取出しますが、賞罰云ふ問題に就ては、賞罰なき云ふ事を成可く用ひないがいゝ云ふ話は、これは極めて尤もな話であります。非常に心身を健全に發達せしめ、善良なる性情を涵養して置けば、そこから適當なものが出て來るから、それこそ力を盡す可きで、後始末の方の賞罰なんかは、吾々の方が充分な事が出來てないから、仕方なく後始末をするので、これが何も自慢になつたものぢやありません。然し乍ら、遺憾乍ら賞罰云ふ事もしなけりやならぬ實狀であるをしまして、その賞罰云ふ事に就きまして比較をする要があります。「賞」の方は、子供の生活に向つて激勵をして行くのであつて、これは積極的である。「罰」の方は禁じて行くのであつて、これは消極的である。だから「賞」の方が教育的であつて、「罰」の方は成可くしない方がいゝんだ、云ふあの通俗的な話も出て來るのであります。所がこの問題は實は斯う考へないで本當の事にならぬと思ひます。子供の生活の何所に向つて、賞罰を持つて行くか云ふ問題であります。子供の生活の結果と言ひますか、出來榮えと言ひますか、現れた所へ賞罰を持つて行くのでありますならば、今言ひます様な事で問題は終ると思ひます。然しその先生は、さつきから考へました如く、子供の生活の結果に止まつて居るのでなく、それが果して真心か真情か、良心的か云つた所に、終始中氣が向けられて居るにすれば、そこに向つて賞罰を言つたにすれば「あなたは實にこんなでもない事をしたけれど矢つ張り真心であつた」云ふ其所に賞をするか、「あなたはちやんとしたけれど、それは實に憎らしい程不誠實なる、不親切なるものである」云ふそこに目をつけて行くか云ふ事が、そこは大きな違であると思ふのであります。即ち賞罰に依りまして、唯子供に良い事をさせるか悪い事をさせるか云ふ事だけならば、

獎勵ミか禁止ミか云ふ單純な話になつて了ひます。それは、いゝ事をすれば賞め、悪い事をすれば叱れば、さう云ふ事は樂々出来る譯であります。

然し乍ら、そんな事が今此所の問題でなくて、道徳的生活態度即ちその眞實、その良心的狙ひをつけて居るさしにして、そこへ賞罰を持つて行くミする、さうした時に、私は斯うなるミ思ふのであります。その賞ミ云ふものは、自分が斯う云ふ事をしたから賞められたんぢやなくて、斯う云ふ生活態度に出て來た眞心で生活した、その所を、幼兒の事でありますから、眞心で生活したけれども少し不純なる、いゝ加減な、間に合せのな事でやつて、自分自身の中ではまだその點に就て、餘り細やかな差別を感じませぬ。所が自分の日頃尊敬する、又自分を愛して下さるあの先生が、自分のした事に就て、その所でそんなに喜んでくれるかミ云ふ事は、その子の氣持を、自分だけでは感じる事の出来ない強さに迄眞心の感じを持たせて行くものミ斯う云ふ事になるのであります。結果ぢやないのであります。何所迄も結果ぢやないのであります。その極くもこの所について、自分が眞心から、誠から、眞情からしました時に、恐らくや子供は、眞心からやつたけれども、その結果ミしては存外な事が起つて居る事がありませう。それを、側に居る先生が、眞心のミところに就て非常なる祝福ミ喜びをして下さるミ云ふ時に、人生はそんなものかミ云ふ事を感じるミ思ふのであります。

又、罰の場合に於きまして、子供はあれで却々實際家でありますから、さう一々深刻なる眞心からのみ生活して居やしません。そこで色々な間に合せの事もチヨイ／＼やるのであります。結果はよく行くのであります。そのずるい事、誠でない事をし乍ら、少し許り氣持が悪くて、而も少し許り良心的でない不愉快を感じて居るけれども、結果は濟んで居りますから、そこで宜かつたミ自己欺瞞で自らを誤魔化して居る時に、自分より良心的なる先生がハラ／＼ミ涙を流して、子供自ら自分を良心的なりや否やミ云ふ事をそれまで感じ得ない子供に代つて感じて下さる。さうしますミ云ふミ、斯う

云ふ事をすりやあ賞められるとか、斯う云ふ事をすりやあ叱られる云ふ問題でなく、人間生活の態度云ふものはそこ迄厳肅なものだ云ふ事を、さう考へる譯ではありませぬが、それを一回毎に體驗する……と言ひますか、受取つて行くのであります。

子供は、皆さんに依て叱られました時に、二つの場合を生ずると思ひます。一つは怖れる場合。これは皆さんの方にも責任があると思ふのでありますけれども、子供の心理の方にも、怖れさせて、もう斯う云ふ事を二度させない程度で吐つて置けばいい極めて單純な場合もありませう。然し、怖れるんでなくて、先生が叱るが故にびつくりする場合があるであらうと思ふのであります。自分では、そんなに叱られる理由があるとも思はないのであります。全體にその子の道徳的振子が緩んで居る、キャラクターとして道徳的眞實性の根本が緩んで居る人間である。その緩みさ加減で一切の事をやつて居る時に、側に居る先生がいゝの悪いの、斯うしろあゝしろの云ふ方法的手段的の叱り方でなく、その緩みさ加減に就て、先生自身堪えられなくなりまして、——詰り帶をキチンと締めて居る人が、ダラリと締めて居る人を見るに堪えられなくなつて、後から、知らぬ人の帶を締めて上げる事もありませう。響が落ちさうになつて居るのを見るに、ずつと、さしてやり度くなる事もありませう。——そのしまり方、眞情そのものゝしまり方が違ふのですから、そこで賞罰云ふ事は、私は向ふの生活をさうするか斯うするか的手段として行はれる時には、賞罰の問題は實に軽い小さい問題であります。

それは手段に過ぎない問題でありますが、又こゝに一つの生活を、その誠まか良心的まか云ふ事に於ての感じ方に段の違つた人が居りまして、いゝ加減に事をやつて平氣で居る人、ギョツとやらなければ堪らない人、二つあつて、堪らない人が、身を以て自分に不愉快を感じまして、憤りを發する、さうするに、此方の者は、そこ迄人生は眞面目な世界も

あるものか、そこ迄人生はしまるものか云ふ事に就てびつくりするのであります。何も幼児をびつくりさせるのが目的ではありませぬけれども、さう云つた意味に於ての効果云ふものがこれが賞罰の、子供にいゝ事を勵まし、悪い事を止めるなご云ふあの程度の問題は別な問題が起つて来るのであります。子供が何ごかうまくやつてさへすれば、根本が誠でなくても良心的でなくても平氣で居られる人の側に成長する子供は、さう云ふ平氣な者になるより仕方ありますまい。それが、子供自身はまだ其所迄ても本當には行つて居ますまいけれども、傍に居る者がさう云ふ嚴しさを持つて居るその場合には、それが子供に影響して来る。或は皆様はさう云ふ時にさう云ふ風にして叱りますか。「もうするぢやない、今度したら——」云ふあの普通の叱り方ミ少し違つた叱り方がある。よく「あなたはよくまあ……よくまあそんな事が出来るなご云ふのはそれでありませぬ。(笑聲)けれども、しよつちう「あなたはよくまあ……そんな事許り言つて居る譯にいかぬ。所謂教育手段ミして用ひます賞罰は、子供を眼の前に引据ゑて、此方の賞罰が向ふに通らなければいかぬ。「方法ですからかうなさいよ。これでもきかなければ、ウム——」ミか何ミか色々やるのであります。然し今私の言つて居るのは、向ふは向ふで小さい子供だから無理もない。決してそれをさうかうするのぢやありません。向ふは小さい子ですからまあ仕様がなないけれども、その眞實性の足りない事に就て見ちや居られないから横を向いても本當の叱り方だミ私は申すのであります。横を向いちやふ。見ちや居られない。詰り良心的でないものに就きましては、良心的な人間は見居られない。嫌になつちまふ。つくづく嫌になつちまふ。引張つて來て叱る、叩く云ふより、嫌になつちやふんですから、然らずんば自分が隠れて行くより仕方ないのであります。これは、善良なる性情を涵養し、ミ云つた程度の問題の時には餘り嚴しいお話でありますけれども、斯う云ふ事がミごかに經驗されるか否か云ふ事は、その子供の將來の道德性態度がさうなつて行くか、この眞情云ふ事に就てさうなつて行くか云ふ事に於て、非常なる影響を與へるものだと思ふのであります。

勿論斯う申します事は、幼稚園の先生が始終道德性ヒステリーであつて、道德性潔白性ミ云ふのであつて、子供がして居る事を一々見ちや居られぬと言つて居る、それを言ふのぢやありません。實に子供の方に即して柔かくだけて居るんですけれども、その生活態度の根本に於て子供が過ちをしたつて失禮をしたつて、そんな事は餘り氣にならないけれども、その生活の末梢末端は氣にならないけれども、あの子の根本の眞情に缺くる所があり、良心的に稀薄なる所がある時に、それがギリ／＼では堪らない。さう云ふ風な人に指導されるかさうかミ云ふ事は、大きな問題になつて來ると思ふのであります。

昔、非常に偉い先生の處へ子供を託して、本當の仕込をして頂くミ云ふのは、さう云ふ場合であつたらしいのであります。即ち眞情ミ云ふ、良心的ミ云ふ事に於て偉大なる人の側に居りますミ、別にその人がさうするか斯うするか、さう教へてくれるかミ云ふのでなくて、さう云ふものに感じて來るのであります。するけたらするけた儘で、嘘なら嘘の儘で、それで平氣で成長するか、その嚴しさを何所かで感じさせられるか、これは違つた問題になると思ふのであります。

○

此所で一寸少し問題を離れた事になりますが、その子供のやつて居ります事に就て、子供の事ですから結果等はさうでもないが、實に眞情、眞心そのものでないが故に堪らなくなつて、ぶつ事もありません。引き据ゑる事もあります。ハラ／＼涙を流して先生自身向ふに行つて了ふ事もあります。あのやさしい先生が、サツミ顔色を變へて何處かに行つちまふ事もあります。さう云ふ時に、子供はよく分りませぬけれども、さうも世の中ミ云ふものは、人生ミ云ふものは、そこ迄眞心、そこ迄良心的なものか、ミ云ふ風な事を一般的に感じて、びつくりするのであります。所が、そのサツミ逃げて行くので宜しいミ私は一應申しましたが、サツミ逃げて行くミ云ふのは、これはその子を教育する本當の態度ぢ

やありませぬ。サーツミ逃げて行く、子供は、自分は平氣だけれども本當の人間はさう平氣で居ないものかミ驚くだけで、それで大いなる影響を受けますけれども、何所迄もそこで終る問題であります。所が今度その先生がサーツミ行つて了ふのでなく、その子供を取捉まへてギュー／＼責めたミします。方法的手段的ぢやないから、相當な所迄責めたミします。その責められる時に、子供は、人生はこんな真面目なものかミ云ふ事を感じさせられるミ共に、自分の事をこんなに心配してくれるものかミ云ふ事を感じるのであります。子供は、愛されるミ云ふ事に於て喜んで居りますが、自分の道徳的態度に對してギューツミ責められた時に、自分の最も深いころに於て自分を考慮してくれる人ミしてそれを受取る機會があるミ思ふのであります。

斯う云ふ意味で、この眞情、この眞心、これを倫理的に言つて、良心的とする、さう云ふ風なものゝ傾向、これは非常に大事な問題になつて來るミ思ふのであります。

こゝで又一つ註釋を加へますが、斯う云ふ眞心ミか良心的ミか云ふ事に就て、唯さう云ふ事だミ云ふのでなく、それをそこ迄厳しく感ずる厳しさを、子供の方もさう思つて受取り感ずるミ云ふ、これは世の中に如何に多くの道徳がありまして、どんな立派な道徳が、ありまして、それ丈ぢや出來ない事でありまして、その道徳を自分の生活の中へ何ミか入れて居る、茲に先生ミ云ふものゝ必要が起つて來るのであります。道徳ミ云ふものが子供を教育して居るんぢやなくて、道徳が子供を教育する場合に於て、道徳の正しさに於て斯うなれば、あゝなればミ命じ、要求する丈であります、そこに先生が立つてやつて居りますからこそ、今の生活態度に關するそこ迄の細かい感じ方が、先づ先生に起ります。さうしてそれが子供に移つて行く事になるのであります。

所がこゝにもう一つの問題があります。——此所で今の話は一旦打ち切りまして——。

道徳的態度を子供に本當に養つて行かうとするに對しまして、今のは本當に中から出て来る、そこにもを置いて居るのであります。所がもう一つ的事云ふのは、ずつとこれ違つた事でありまして、此所で全く頭を變へて頂かぬ中途半端なものになるのであります。人間生活は自分一人で暮して居るのでなくして、人と一緒に暮して居る云ふ社會的關係の中に置かれて居ります。同時に又人間の生活は、唯氣持だけで考へて居るものでなくて、恐らく外の自分の氣持から見る云ふは、外である云ふ事の色々の事實の中に置かれて生活して居るのであります。人間同志と一緒に居る云ふその關係は、色々の事實の關係に於て生きて居る云ふ事でありまして、その事實の關係に於て生きて居り、人間生活の關係に於て生きて居る云ふ事を他の言葉で申します。これを幼兒の問題としてはずつと離れた話であります。現實的の申しますか……或はリアリステイックな世の中申しても宜しいのであります。若し私が人關係なく——物でも宜しいのであります。——唯一人で寢轉んで居りますならば、その時は私は、自分の生活丈を持つて居る丈であつて、現實の、リアリステイックな生活を持つて居ないのであります。

所が人間生活は、必ずリアリステイックな生活を持つて居る。そこでそのリアリステイックな他の人との關係、社會關係とか或は物事——物事云ふのは、實際の物である場合もありますし、仕事である場合もありますし、そこに他の、自分以外の條件に従ふ云ふ事がありますが、——さう云ふ事があつた場合にその中でその關係、その現實の影響を正しく受けて行くかどうか云ふ事が、一つの道徳的生活態度の問題になると思ふのであります。眞心なん云ふお話は、此方から出る、湧き出づる泉の如きものであります。それが、それを暫く問題を別にしまして、自分が考へて居る外の條件に基いて行くのであります。この外の條件に基いて行きます方を現實的必然の中に自然に來る傾向も言つても宜しいのであり

ますが、例へば色々な事がありますが、或約束をしまして、さうして自分の受持なら受持が決つて来る。その受持云ふものが、それを引受けるか引受けないかそこ迄は自分の眞情で動いて居つて宜しいのであります。眞心から喜んでその任に當る、或は、ここに依りましたならば否でも應でも自分を殺して良心的に生きる云ふ場合もあるであります。然し要するにこれは、自分の中から出て来る事である。然し既に一度その生活をしてしましたならば、今度は眞心が自分の方から出て来るかさうかの問題でなく、その場の實際の實狀、自分が斯う云ふ役を持つた以上、これをしなければ全體にさう影響して来る、斯う云ふ現實を感じる。この力がこれが道德生活の一つの問題であります。

例へば、非常なかけ離れた例を引くのでありますが——私はこの頃、青年學校の青年に教育する修身、倫理の方で色々な講習をして居りますので、その例が頭に一つ浮びましたが、例へば青年學校の公民科要目の中に、納税云ふ事があります。その要目の中にあります友達は愛すべしとか、或は親に孝行すべしとか云ふ事は、全然眞情の方から育つて行くものでありますけれども、詰り人間の、さうしてもさうならざるを得ないものが、中から出て来るのであります。所が納税なん云ふ事は、これはよくこの講習で冗談の様には話すのであります。さうしたつて納税したくなる云ふ事は無い。金を取り度い云ふ事は、眞情から出て来るかも知れませぬが、税が納め度い云ふ氣持は、さうして見たつてないのであります。勿論今日この國の非常に費用の要ります時に、三宅坂に行つて獻金する云ふ方は、眞情から出て居るのであります。然し、一定の割當てられた税を拂つて行く云ふ事は、眞心から出ませぬ。これは何所から出るか云へば、その現實の理解がついて居る時に、國云ふものは斯う云ふ世界で、經濟がなければ成立たないので、それは納税に依て成立つので、それが行使出来るか出来ないか、自分には斯うふり當てられて居る云ふ事が分つて居て、その現實の理解に於てさう云ふ事をする丈の話であります。この納税をちやんこするかしないか云ふ事の道德上の差別は、眞心の問題

でなく、そんなに納税をちやんこする方だつて、さうも實に喜び勇んで嬉しさうに眞心から税を納める事はないのでありますから、そつちの問題でなく、現實がピンを取られるかさうか云ふ問題であります。それが人間生活の道德を稱されるものゝ中に可成り澤山にあります。

○
そこでその現實云ふものに就て、さう云ふピンをした考へ方言ひますが、感じ方言ひますが、これは眞心の方に較べましては少し難しい問題であります。眞心の方は、例へば子が親に孝行を盡す云ふ問題に就きまして、幼児にはまだ大した複雑な事は分りませぬけれども、ねえ、お母さんに對して……云ふ様な事を言へば、何もなく少しはその感じに分るのであります。けれども現實的な方面になつて來ますと、これは餘つ程色々の前後の關係がちやんこ分らなくちや、その感じが取れない譯でありますから、幼児にまつては少し難しい事言へば難しい事であります。

隨て只今例に擧げました社會生活の、國家生活の大きな現實に因するさう云ふ感じ等を子供に與へて行く事はとても出來ませぬが、幼児同志の中に於て、あの幼稚園の單純なる生活の中に於ても行はれて來ます所の或程度の現實云ふものは、これはきちんこ守らせなければならぬ。又、守らせる事が出来るであらうと思ふのであります。この幼児生活の中に起つて來る現實、これの極めて實際的な例は、幼児がそれ々々相談して決めて行きます義務云つた様なものであります。

私は、幼稚園に於きまして觀念的に、義務とはさう云ふものであるか、義務を守らなければさうであるか、斯う云ふ様な事は、幼児に勿論分らせる事は出來ませぬ。然し乍ら例へば、あなたが此處に番をして居なければこの犬が逃げる、あなたがこれをさうかして居なければ風が吹いてこれが飛んで了ふから、あなたはこれを抑へて居なければならぬ、云ふ様な事は眞心の問題ではありませんが、現實の問題であります。その、自分が其處に居なければ紙が飛んで了ふから或

時間抑へて居る云ふ役廻りになつた時、それをいゝ加減にして丁ふ、それは眞心、眞情から言へば面倒なものでありませうが、その現實の中に自分が這入つて居るのであります。さうするに、それが理論的にさうであるよりも、その現實を現實として感ずる事に於て、適當なる處置が取られて行かなければならぬ。これは即ち一種の現實の道德感であります。

この意味で私は、幼稚園の子供に、善良なる性情を涵養し云ふ様な事で指導して居るのは宜しいのであります。その中で、一種の軽い意味の責任感的な教養云ふものは必要だと思ふのであります。而もその責任感の教養云ふものは、責任云ふものゝ理窟から入つて行つて、責任感にさうなる云ふ様なそんな難しい事ぢやないのであります。今この現實のこの物との關係、この事との關係のその生活がさうなるか云ふこと、この感じさへ養はれて行けば、即ち一種の——責任云ふこと大袈裟でありますが見ます責任的になつて居る、この意味からしまして、私は幼児教育の中で、道德的生活態度云ふものを養つて行きます爲に、さう云ふ方面を大いに注意する事が必要ぢやないかと思ひます。

○

私はこれで、二つの事をお話したのであります。この他澤山に、道德的生活態度として養ひ度いものはあるであらうけれども、餘りこれが大きく幅を利かして來まして、あれもこれも云ふ事になります云ふこと、幼稚園で直ぐに道德教育の全般的な事をする事になりまして、折角道德云ふ字さへも持つて來ないで、善良なる性情の涵養云言つて居る基本教育の特質が毀される危険があります。だから此所では餘り多くを望む可きぢやありませんが、その善良なる性情を涵養して居ります中で、その子が本當に將來の道德生活をするに至るに就て、缺く可からざる方向、即ちどんな方向を養はうとするか云ふこと、自分の方から眞心でやつて行く云ふ傾向に、實狀に即して、現實を現實として感ずる云ふ一種の責任感であります。唯責任云ふものは要するに現實感の發露に他ならぬのであります。然し斯う云ふ二つ位は、何時

も私共の心掛けの中にある可きぢやないかと思ふのであります。

さて斯う云ふ様な事を、そんならばさう云ふやり方でその生活態度を其方へ向けて行くか云ふ事であります。これは先程來賞罰のところで一應申しました事ですが、この生活態度でありますからして、さう云ふ事をすべきものであるさかすべからざるものであるさか云ふ觀念に上せて來ては、本當の態度になりませぬ。態度とは、自然にさうなつて行く事なのであります。可きが故に可きだ云ふ時には態度になりませぬから、そこで、可きであるさか云ふ様な事にはしないのであります。そこに現實なら現實の必要を、子供に感じる様に環境から仕向けられて、自らさうなる、さうならなければ何所迄も先生はあんたがそんな事をしてくれちや困るぢやないか、いゝ悪いさ云ふ批判を下さないで、困るぢやないか、現實のその必要が、あんたの無責任の爲にさうかなるなら困るぢやないか云ふ丈の話です。自分の小さい者が責任を守るか守らないか云ふ事に就て困るか困らないか云ふ觀念が出て來さへすればいゝのでありますから、可きものだ云ふ形、法則にしないで、その行き方で態度を態度として養つて行く行き方で行く可きであると思ふのであります。その態度を子供が現しました時に、お前は今斯う云ふ態度に居斯う云ふ生活態度に居る、それが非常に喜ばしい事であるが嬉しい事であるが……云ふ様な事を——非常に面倒な話し方を致しますが、お前がその生活態度に居る事はそれは實に嬉しい事であるさか悲しい事であるさか云ふ事を先生自身の眞情その儘でパーツミして行く事は、非常にいゝ申しました。然し眞情そのものでパーツミして行く事、それを子供の生活態度から一つ拔出して來て、斯う云ふ生活態度はいゝんだ云ふ普遍的な價值をそこに持出して來る事は違ふのであります。今子供がやつて居る事、その事に就て先生が、今起つて來た氣持をその儘ぶつつけて行く事は非常に強い力があるさ云ふ事を申しました。これは何所迄も、今のこの子供の生活態度に即して行く感じでありまして、その生活態度を生活から拔出して普遍的なものに眺めて、それを賞め

るかござうするとか云ふ事は大變違ふのであります。これは幼児の訓育に就きましては、一般に何時でも非常に大事な事でありまして、何所迄もそこを賞めてそれを一般にしては了はないのが、幼児訓練の大きな祕訣であります。この場合に於てもそれが言へると思ふのであります。

そこで子供が例へば、いぢらしくも或責任を守つて、自分が言ひつけられた事に就てちつみやつて居るをいたしましたならば、そのやつて居ることに對して嬉しくなつて、お蔭で現實が斯うなつた云ふ事ですから御禮を言つてもいゝけれどもそれを拔出して、お前のやつて居る事ぢやなく、その事も含まれる一般的責任感はさうだ云ふ様な事を言ふのはよくないと思ふ。即ち今この場でこれを現實的に感じた事を喜んで居るのであつて、それが責任感云ふものであるかござうか、さう云ふ生活態度の普遍的なものであるかござうか云ふ事は、持つて來るものもない程事實の迫つて居る事でありまして、そこではその事としてしか取扱はないのであります。さう云ふ眞實さが、或は現實の本當の感じとか云ふ様なものに依つて生活する、さう云ふものがお話なんかの中に多く取入れられて來る云ふ時には、既に客觀化されて居ますから、そのお話の中では、さう云ふ事を普遍的問題として取扱つて行く云ふ事は出來る事でありまして、又そこで子供に、斯う云ふ事である云ふ稍々一般的様な心持を養へるかと思ふのであります。即ちこの眞情發露とか、或は現實に對する責任とか云ふ様な事は、童話の中に於きまして始めて多少普遍的に取扱はれるものであるかと思ふのであります。

何故私が斯う云ふ事を申すかと言ひます云ふに、童話の中に取扱はれるを申しましたのは、童話の中で取扱はれるだけのお話をして居るのでなく、これをくれぐれもその子供の生活の實際の中に普遍的に取扱つちやいけない云ふ事で御座いまして、矢張りそれを普遍的に取出して、修身とかお説教云ふ形になつてはいけません。この意味に於て、童話の意味が取扱はれて、比較的間違が少いと思ふのであります。

色々なお話が混りますが、子供が童話を聞いて居る時の心理云ふものは、御承知の通り普遍と個との間にあります。實際遊んで居る太郎さんは、普遍ではなく、個の太郎さんであります。所が童話の中の太郎さんは、本當の太郎さんであると共にその太郎さんに依て代表せられた何歳かの全體的なものでありまして、個と全體との間を出たり這入つたりして居るのが童話の聴き方であります。まさまじ本當の太郎が出て来た様にも感ずるし、その中にさう云つた子供云ふものに普遍化されて行くのであります。同時に童話を聞いて居ります子供の心理は、その童話の中に表現せられて居る客觀の感じと、それを自分の事として感じ、出たり這入つたりして居るのがその心持であります。その童話を實際聽いて居ます時は、普遍を普遍として感じて、この中に具體化、個體化が入つて來ますし、人ごみとして聽いて來してもその中に自分が入つて來る。それが童話の特質であります。そこで童話の世界に普遍的に持出して、その生活態度、この人が責任を感じて斯う云ふ行き方で生活して居る云ふ事が、童話の中に取出されますと、その實際それ自體と、之を倫理學や修身の形にしますと、餘りにも普遍的になり過ぎた、其間の出たり這入つたりする感じを、子供に持たせ得るのであります。そこで若しも斯う云ふ事を取扱ふとするならば、童話の中に於きましても斯う云ふ生活を強調する、或は斯う云ふ生活に對してそれを吾々が價値づけ行く態度を見せる云ふ事は、少し實際的生活から見るに普遍的になつて來ると思ひます。

兎に角さう云ふ風な方法は、誰も色々あらうと思ひますが、心身を健全に發達せしめ、善良なる性情を涵養するから斯うなつて行くのでありませうけれども、吾々は、さうなつて行くだらうと任して置くだけでは心許ないのであります。併せて道徳生活へ子供を持つて行かうと云ふ強い文化的の立場で見て、道徳生活云ふものに就ては幼兒と結びつくころではさう云ふ事が問題になるかと言へば、今の二つが問題になるぢやないか斯う云ふ事を考へたのであります。

今回のお話は、目的論的の方面であります爲に、多少固いお話になりました相濟みませぬ——。(以下次號 文責在記者)